

4月



釣りを楽しむ家族 千葉市 HP より



河口風景 千葉市資料データベースより



あの日のあの川 リレー日記 ～第15話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第15話主人公 工藤拓哉

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県花見川)

「あの時の川の名は？」

いつのこと？：中学生時代

どこの川？：花見川

ついに来てしまった。「あの日あの川」リレー日記はここまで多くの人がバトンを繋ぎ、川の思い出を語ってきた。いつかは順番が回ってくるだろうと、僕が今まで生きてきた中で、川にまつわる出来事を探していた。「川と人」ゼミに入ってからには多くの川と出会い、ここに書いても書ききれないほどの思い出がある。しかし、せっかくこういう場をいただけたからには、自分が生まれた場所の川について書きたい。その一心で子供時代の川の思い出をしばらくだそうとしたが、まったくと言っていいほど出てこない。なぜだろう、僕の記憶の中に川はいない。これまでに、地元の川を書いている人はたくさんいたのに、僕はなぜ出てこないのだろう？そう思っていると、ふとあることに気づいた。「あれっ…実家の近くに流れている川ってあったか？…」なぜ今まで気づかなかったのだろう、僕の住んでいる家のまわりに川は流れていなかった。思い出せないのは仕方がない、子供の頃、身近に遊ぶ川がなかったのだから。そこで、なぜ実家のまわりに川が流れていないのか、調べてみることにした。

僕が生まれ育った千葉市は、もともと川が少ないため、昔はあちこちにあった湧水や、用水路を利用して水を供給していたようだ。しかし、身近にあった用水路や溜池などは、急速な市街地の発展と共に埋め立てられた。さらに建物や舗装路などで雨水が地下に染み込まないため湧水も涸れてしまい、身近に水と触れ合う場所がなくなってしまったようだ。そんなこと初めて知った。川どころか触れ合う水場すらなかったのである。そんなことを知った矢先、本当に書く思い出なんてないじゃないか、なんてことを思っていると「花見川」とい

う川の名を目にした。名前は聞いたことあるな、と今度は花見川を調べて見ることにした。

最初に予測変換で出てきた単語は「釣り」であった。それと同時に中学校の時に釣りに熱中していたことを思い出した。その記憶のほとんどが海釣りだったが、その中で1回だけ川釣りをしたことがあった。その時は、実家から自転車で約1時間30分ほどかけて河口付近に行き、バス釣りをした。かかった時間を見ても相当の距離であることは分かるし、今となってはよく自転車で行ったなとすら思う。そんな道のりを友達と日が昇る前に出ていき、当時の身長ではとても大きい釣り道具を肩にかけ、さっそうと出かけたことをこの文章を書きながら思い出した。その友達は釣りのことは何でも知っている、言わば師匠のような人だった。師匠とは昔から仲が良く何をするにも一緒だったが、自転車でここまで遠出をするのはお互い初めてのことだった。内心心配ではあったが、出発してしまえばそんなもの吹っ飛んでいた。真っ暗な中、ひたすらに自転車をこぎ続けた。到着するまで会話はほとんどなかったが、お互い冒険しているかのようにわくわくしていることはわかった。そして、日の昇るころに目的地に到着した。正直、ここまで来るのに満足してしまい釣りなんてどうでもよくなっていた。当たり前だが、そんなことは師匠には言えず釣りを始めた。ターゲットはバス、種類は覚えていないがシーバスだったような、そして初めてのルアー釣りだった。しかし、初めて何時間経ってもまったく釣れる気配がなかった。師匠には、ルアーを生きているように動かせとアドバイスを受けるが、そんなこと言われても釣れないものは釣れなかった。その間に師匠は何匹か釣っていた。それを見て意地になり休むことなくルアーを動かし続けたが、糸が引くことはなかった。結果的に言えば、何も釣れないまま帰路に着いた。帰りは、行きのわくわく感とはまさに雲泥の差であり、体力のすべてを使ったが、不思議とまた行きたいという気持ちが込み上げていた。これでこの話は終わりである。

なぜこんなオチのない話をしたのかというと、もう分かっていると思うが、釣りに行った川が花見川だったのだ。「あの日あの川」を書かなかっただけで知ることがなかっただろう。この花見川が、実家で一番身近にある川で、唯一覚えている思い出である。そう考えると、何気ない釣り話が、すごく輝いた思い出になった気がする。僕はこのような機会をいただき、地元の川の思い出として新たに心に残すことができ良かったと思う。と同時に、僕と同じように子供時代、身近に水と触れ合う環境がなく、思い出がない人をこれ以上増やさないように、水辺をどんどん増やせるような活動を行ってほしい。また、僕もゼミを通して少しでも力になればいいと思っている。

(次は渡邊麻里乃さんにバトンを託します)



花見川サイクリングロード
(新検見川地域情報より)